

■ 時代のフェーズが大きく変化〜ドル安一辺倒の流れは一巡!?

トランプ米大統領が署名さえすれば、とうに成立しているはずであった——件の米追加経済対策は、すでに米議会上下両院で可決している。どうやら、トランプ氏は同法案を「恥さらし」と批判したうえで、現金給付の額を大幅に増やせと要求することで国民人気を得ようとしている模様。まったく、どちらの方が「恥さらし」だか…。とまれ、同法案への署名がなされないと一体化している2021会計年度予算も動き出せず、つなぎ予算の期限が切れる28日までに対応がなされないと、米政府機関が一時的にも閉鎖に追い込まれる可能性があるという。

この点に関して、今のところ市場の受け止めは至極冷静。すでに欧米勢はクリスマス休暇入りしているし、遅かれ早かれ経済対策と予算は動き出す。大事なクリスマスの季節にトランプ氏の独り芝居に付き合っただけでいられないといったところであろう。

一方、英国と欧州連合（EU）の通商交渉は、ようやく大枠合意に至る運び。むしろ、市場は通商交渉の進展を好感しており、米・日の株価はともに強含みで推移している。

全体にリスクオンのムードが色濃いわりに、ドルは比較的強めに推移している。やはり、これはクリスマス休暇を控えてポジション調整が進んだ結果と見るのが適切であろう。なにしろ、これまでにドルショートや円ロングのポジションは相当にうずたかく積み上げられてきていた。よって、足下の動きをして「ドル安の流れ一巡から反転ドル高へ」と見るのは拙速に過ぎる。

ただ、ここにきて米国の追加経済対策案や英・EUの通商交渉などがバタバタと忙しくまとまり、多くの国や地域においてコロナウイルスワクチンの接種が始まるなど、今まさに一つの時代のフェーズが大きく変化するタイミングを迎えているということも事実であろう。

そうでなくとも、年末年始は株価の動きにも大きな変化が生じやすい。年内、いままでの調子で米・日株価が強含みでの推移を続けるならば、逆に年明け以降は一旦大きく調整する場面が訪れるのではないかと危惧される部分もないではない。

NYダウ平均は依然「上昇斜行三角形（ダイアゴナル・トライアングル）」のパターンを形成中で、いずれ上昇基調が「一旦お休み」となる可能性は高まっている。また、日経平均株価については今週、すんでのところで25日移動平均線割れを回避することとなったが、近くあらためて同線を下抜いてくる可能性もある。

米・日の株価が一旦調整となれば、これまで続いてきたドル安の流れが反転してもおかしくない。国内での材料としては、やはり大都市圏でのコロナ感染拡大の猛威が一段と厳しい行動規制の実施を余儀なくさせ、目先の景気悪化の懸念が一層強まる可能性があるという点に要警戒。場合によっては、再度の緊急事態宣言が発令されないとも限らないと心得ておかねばなるまい。

また、英国でコロナウイルスの変異種が複数見つかったことから、ともすると感染拡大のペースが一段と加速し、そのことがドルの買い戻し需要を高める可能性もある。

ユーロ/ドルやポンド/ドルについては、英・EU間の通商交渉合意によって一旦「(買い)材料



出尽くし」となる可能性がある点に留意しておく必要がある。

ユーロ/ドルは、一つに上昇チャネルの下辺を下抜けるかどうかが当面の焦点となろう（左図参照）。仮に、同水準を下抜けた場合には、まず12月9日安値＝1.2059ドルが試され、同水準をも下抜けると次に1.2000ドル処が意識されやすくなると見られる。市場には「2021年もユーロ高の基調は続く」と見る向きが少なくないようだが、筆者は個人的には懐疑的である。（12月24日 10:10）